

高松北警察署建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報

平成 10 年 度

高 松 城 跡

1999.3

香 川 県 教 育 委 員 会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

例 言

1. 本書は、高松北警察署建設に伴い平成10年度に実施した高松城跡の埋蔵文化財発掘調査の概要を記録したものである。
2. 本調査は、香川県文化行政課が調査主体となり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。
3. 本年度の財団法人香川県埋蔵文化財調査センターの調査組織は次のとおりである。

総括

所長	菅原良弘
次長	小野善範

総務

副主幹兼係長	田中秀文
主査	長尾寿江子
参事	別枝義昭

調査

主任文化財専門員	廣瀬常雄
文化財専門員	山元素子
文化財専門員	岡本利
調査技術員	滝井理加
参事	長尾重盛

4. 調査に際しては次の機関に御協力を頂いた。記して謝意を表したい。(敬称略)

香川県警察本部

5. 本書で使用した略号は次のとおりである。

S D : 溝, S E : 井戸, S X : 性格不明遺構

6. 本書で用いている方位の北は国土座標系第Ⅳ系の北であり、標高はT.P.を基準としている。
7. 挿図の一部は、国土地理院地形図(1/25,000)を使用した。
8. 本書の執筆、挿図の作成・浄書は調査担当職員が分担して行い、編集は山元が行った。

本文目次

1. 調査に至る経緯と経過	1
2. 調査の成果	
1. 立地と環境	2
2. 調査の概要	4
3. まとめ	13

挿図目次

図 1	遺跡位置図(1/25,000)	1
図 2	高松城想定図と調査地(1/5,000)	3
図 3	S D02断面図(1/40)	4
図 4	S D04断面図(1/40)	4
図 5	遺構配置図(1/200)	5~6
図 6	S X01平・断面図(1/40)	7
図 7	S X22断面図(1/40)	7
図 8	S X37断面図(1/40)	8
図 9	S E01平・断面図(1/40)	10
図 10	S E02平・断面図(1/40)	10
図 11	S E04平・断面図(1/40)	11
図 12	S E05平・断面図(1/40)	12

写真目次

写真 1	S X01 (北から)	4
写真 2	S D04遺物出土状況 (東から)	4
写真 3	S X22断面 (東から)	7
写真 4	S X37遺物出土状況 (北から)	8
写真 5	S X37断面 (西から)	8
写真 6~9	S X37出土遺物	9
写真 10	S E03井戸枠検出状況 (東から)	11
写真 11	S E03 (西から)	11
写真 12	S E04井戸枠・竹出土状況 (南から)	11
写真 13	S E04出土遺物	11
写真 14	S E07 (北から)	12
写真 15	S X10鬼瓦出土状況 (西から)	12
写真 16	調査区全景 (西から)	13
写真 17	調査区から本丸を望む (西から)	13

1. 調査に至る経緯と経過

香川県警察本部は現在の高松北署をJR検診センター跡地に移転させることになった。当該地は現在の地割や江戸時代の絵図から、上級武家屋敷が建ち並んでいた場所であり、生駒藩の時代には西島八兵衛の屋敷地も想定される場所である。平成8年10月に文化行政課が試掘調査を行ったところ、近接地の西の丸地区で平成8年度に行った調査の第1遺構面および第1整地面に相当する面は近現代の攪乱が及んでいるものの、第2整地面、第3整地面に相当する面は遺構が残存する可能性が高いことが推定され、文化財保護法に基づく事前の保護措置が必要となった。

高松北署の移転工事も急がれたため、関係諸機関の協議の上、調査対象面積を900㎡として、発掘調査は平成10年3月に表土剥ぎや現場事務所の設置等の調査準備を行い、平成10年4月～6月で埋蔵文化財調査を行うこととなった。また、発掘調査に先立って地表下約1.5mまでの攪乱層の除去を埋文センター側の指示により原因者側が行った。

平成10年度は4月1日付で香川県教育委員会と財団法人香川県埋蔵文化財調査センターの間で締結された「埋蔵文化財調査契約」に基づき、平成10年3月の調査を引き継いで調査を行った。現場作業は4月6日より再開した。近現代の攪乱が多くあり、コンクリート塊などが残っているものなども多く、攪乱の除去に手間取った。6月19日をもって現地埋め戻し、現場事務所の撤去を終え、香川県警察本部に用地を引き渡した。



図1 遺跡位置図(1/25,000)

2. 調査の成果

1. 立地と環境

瀬戸内海に面した香川県のほぼ中央に、低い山塊に囲まれた高松平野がある。高松平野は香川県の平野のうち、最も広大な面積を有し、東西20km、南北16kmの範囲に及んでいる。現在の高松市街は、この高松平野を南北に流れる香東川・御坊川（旧香東川）が形成した三角州帯の先端にあり、海側に張り出した砂堆の存在が想定されている。

高松城跡は高松平野のほぼ北端に位置し、高松城の歴史は天正15年（1587）生駒親正の入封により始まる。ただし南海通記の「讃岐高松付記」によると、ここは以前には野原と称され、付近には漁村が所在していたことがわかる。香東郡野原は中世の荘園で東・北は海に面し、西南に石清尾山が天然の要害をなし、南方が高松平野に開けた海浜であった。このような立地は、いったん城郭が築かれれば攻防ともに備わった堅城となるが、軟弱な砂地の上の築城や類例の少ない水際城の縄張りには特殊な知識と経験が必要だったであろう。築城工事は天正18年に完成したとされるが、当時の他城の例からすると、その後も普請や作事は続けられていたと思われる。しかし、その二代後の生駒高俊の時に有名な生駒騒動が起き、寛永17年（1640）に生駒氏は改易となった。そして寛永19年（1642）に水戸徳川氏より松平頼重が生駒氏の旧領のうち東讃岐12万石に封じられ、高松藩の成立をみたのである。こののち、松平氏の治下に幾度か城郭改修の手が加えられることになったが、帯郭西端の侍屋敷が堀によって魚店町と仕切られて米蔵丸・作事丸（あわせて東ノ丸と呼ばれた）が新造されるのは、頼重の寛文11年（1671）からのことであるとされている。

明治2年（1869）の版籍奉還とともに旧城郭は兵部省に接収され、一帯は諸公庁の用地などに供されることとなった。その後三次にわたる高松港の築港工事などで旧城郭部は大幅に埋め立てられ、昭和20年の高松琴平電気鉄道の軌道変更などで、ほぼ現在の景観となった。

高松城跡一帯の地域は、近年、高松港頭土地区画整理事業などの大規模な開発が相次ぎ、それに伴う発掘調査で遺構・遺物が多数検出されている。平成7年末から8年3月までの都市計画道路予定地の調査では、江戸時代を中心とした礎石建物跡や井戸跡、石組みの溝跡や暗渠跡等の遺構や家紋瓦・鬼瓦や染め付けなどの遺物を検出した。そして当該地が高松城の西の丸の西外郭に位置する高松藩の上級家臣団の屋敷跡に相当することや、明確な遺構面が4面存在することなどの成果を上げている。平成8年度は、先の調査区の南に隣接する地域の調査を行い、同様の江戸時代を中心とする遺構・遺物を検出している。また最下層に安山岩角礫を用いた護岸施設と考えられる遺構を検出している。これはその中へ投棄された瓦器や東播系の須恵器などの遺物から中世前半に属するものと思われる。また平成7・8年度の調査区の中を鍵の手状にのびる道路遺構は、生駒氏末期か松平氏初期の「讃岐高松丸亀両城図」や松平氏初期に描かれた「高松城下図屏風」に見られる表現と一致することが判明している。平成9年度は小規模の調査ながら石組み井戸や備前焼・明銭等の遺物を検出している。

今回の調査は高松北警察署建設事業に伴うもので、調査区は平成7年度から9年度まで行われてきた調査区からほぼ真南に位置する。当該地はこれまでの調査結果や生駒氏末期から松平氏初期に描かれた絵図などから、高松城外堀と中堀の間に相当し、上級武士団の屋敷跡であることが予想できる。

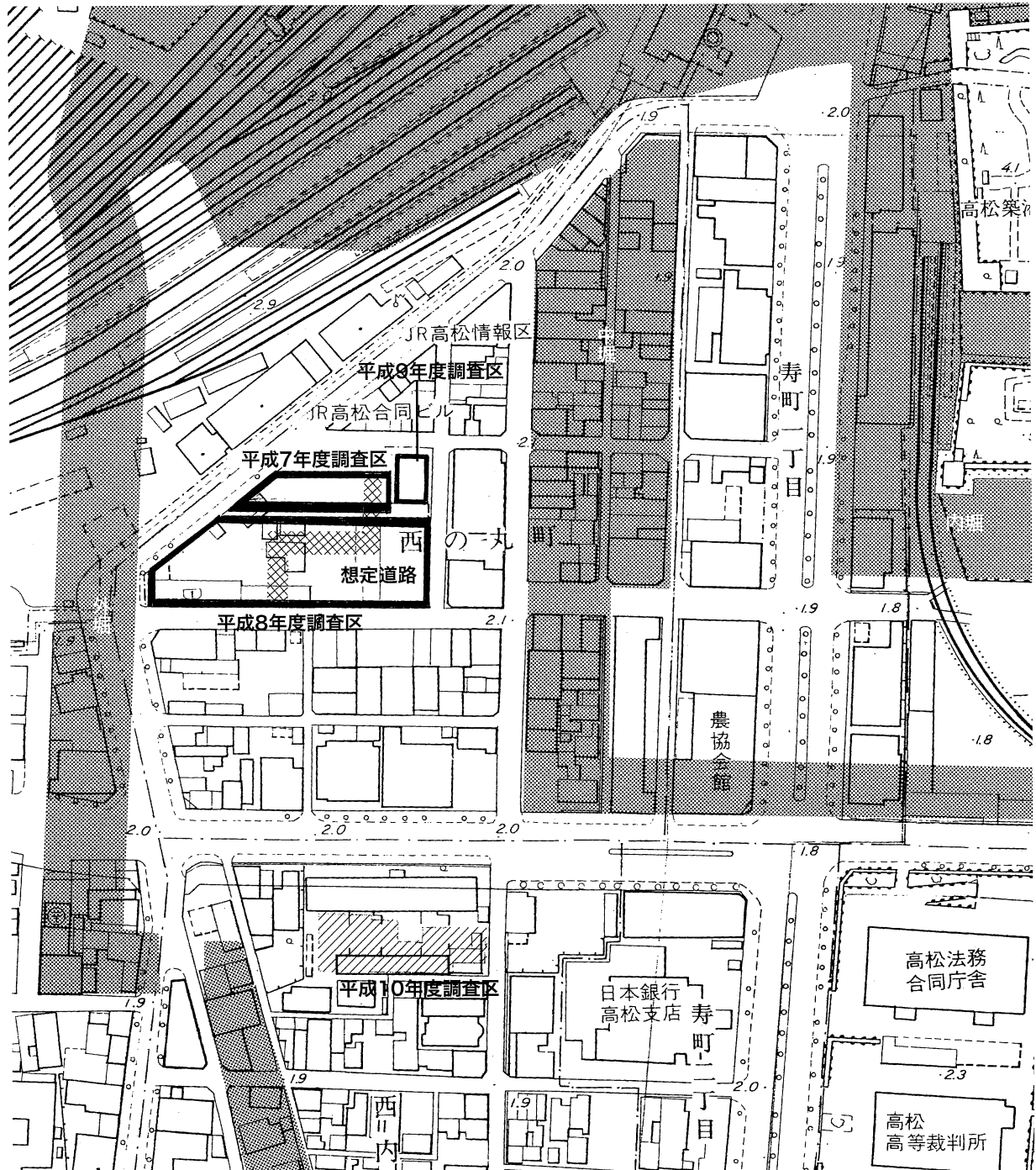


図2 高松城想定図と調査地(1/5,000)

2. 調査の概要

高松城西の丸の調査は平成7～9年度と高松港頭地区再開発事業に伴って発掘調査が行われ、貴重な成果が数多く得られている。平成8年度の調査では明治時代から生駒藩政期までの期間に合計4面の遺構面が確認され、そのうちの江戸時代期の遺構面からは平行して配された溝や柵列を検出し、この間に道路があったことが想定された。道路状遺構は途中で鍵の手状にクランクする描写がみられることから、発掘調査の結果と絵画資料の対比が可能になった。

今回の調査区は高松城本丸の西南方向、中堀と外堀の間の位置にあたる。平成8年度に調査を行った地区の南側150mの位置にあたり、『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』から生駒藩政時代には西島八兵衛の屋敷地にも比定されている。しかし、JR検診センターの建物の基礎による攪乱が著しく、遺構面は平成8年度調査の第4面（16世紀末葉～17世紀中葉）に相当する面しか残っていなかった。

SD02・02-2 調査区のやや西寄りを流れる南北方向の溝である。ともに幅60cm、深さ20cmである。2条の溝の間隔は約5mである。出土遺物はほとんどなかった。この溝状遺構は平成8年度港頭地区再開発事業で調査した際に検出した道路状遺構のほぼ延長部にあたり、『高松城下図屏風』に描かれている道路と一致する可能性がある。SD02はSX09により壊されている。その他にもこの道路状遺構の上面に瓦や陶磁器類を廃棄した土坑が多く、このころに道路としての機能が失われたのであろう。

SD04 調査区の東半分において南端で検出した溝である。調査区南端中央付近で攪乱により壊され、それより西側では検出できなかったため、この地点で途切れるか南側へ屈曲するかどちらかであろう。深さ10cm程度、溝の南肩は調査区外へ延びるため幅は不明である。溝の内部からは瓦、陶磁器類が出土した。この溝も屋敷地の境界を示すものであろう。

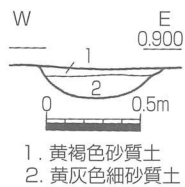


図3 SD02断面図(1/40)

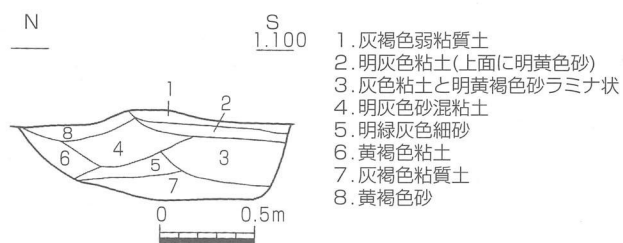


図4 SD04断面図(1/40)



写真1 SX01(北から)



写真2 SD04遺物出土状況(東から)

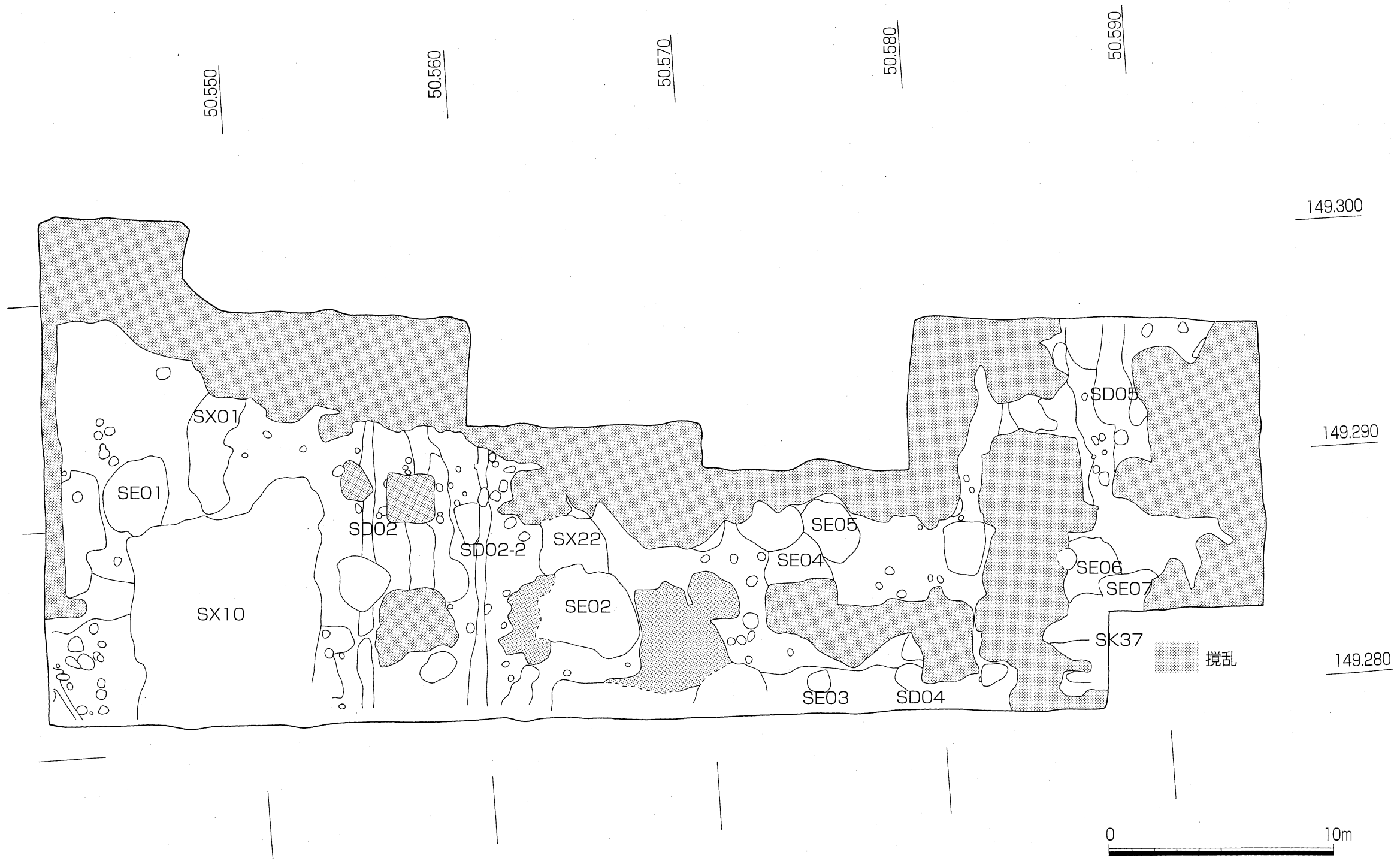
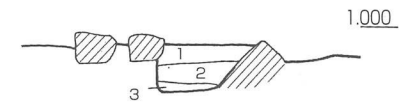
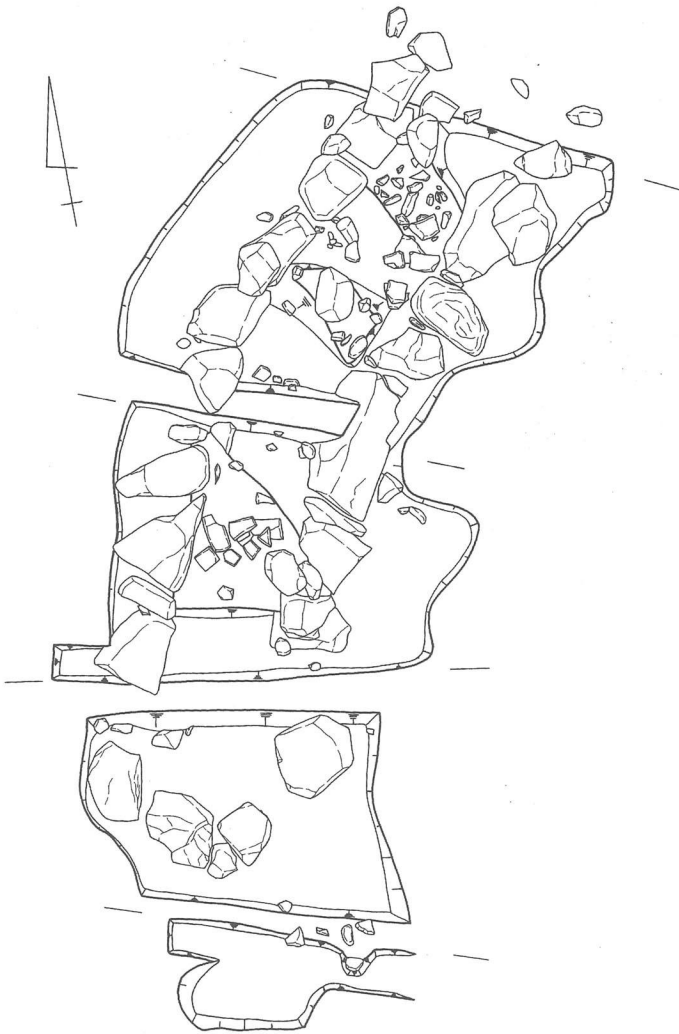
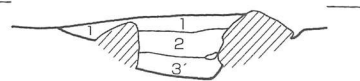


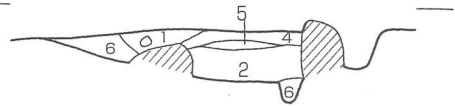
図5 遺構配置図(1/200)



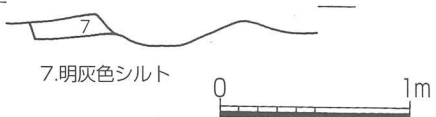
- 1. 褐色砂質土(少しシキ混)
- 2. 明灰色粘質土(Fe混)
- 3. 明灰色砂(Fe混)



3': 3にシキが少し混

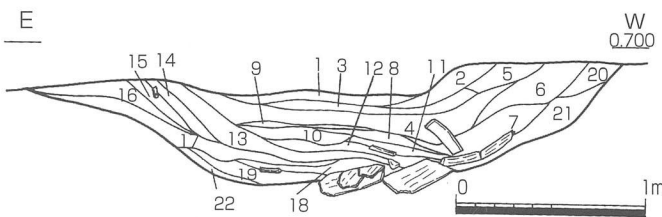


- 4. 灰褐色砂質土(炭が少し混)
- 5. 明黄褐色砂
- 6. 褐色砂質土



7. 明灰色シルト

図6 SX01平・断面図(1/40)



- | | |
|-------------------------------|--------------------------|
| 1. 灰褐色砂混粘質土(炭混) | 12. 茶褐色粘土(木片) |
| 2. 青灰色砂混粘質土(貝混) | 13. 黒褐色粘土(木片) |
| 3. 暗灰色砂混粘質土
(明青灰色土筋状・貝類多い) | 14. 灰色粘質土 |
| 4. 緑灰色粘土混砂質土(炭) | 15. 明青灰色砂質土 |
| 5. 暗灰色砂混粘質土
(貝少し・炭) | 16. 明褐色粘質土(黄色土混) |
| 6. 暗灰色砂混粘質土
(明青灰色土多く混・炭) | 17. 茶褐色粘土
(植物遺体・木片多い) |
| 7. 茶褐色粘土(炭・貝) | 18. 明緑灰色砂混粘土 |
| 8. 茶褐色粘土 | 19. 茶褐色粘土
(植物遺体・木片多い) |
| 9. 茶褐色粘土(炭・貝) | 20. 褐灰色粘土混砂質土(黄色土少し) |
| 10. 緑灰色上ブロック(貝多い木片・炭) | 21. 灰色粘土混砂質土(炭) |
| 11. 茶褐色粘土(木片・貝) | 22. 明灰色細砂 |

図7 SX22断面図(1/40)



写真3 SX22断面(東から)

SX01 調査区の西よりで検出した石組みの遺構である。南北に長いが、北側は後世の攪乱を受けて失われていた。南側も攪乱でかなり壊されていたが、石を南側へ配しており、この場所で終わっていたようである。幅1.2m、深さ30cmで両側に1辺30cm程度に四角くまたは長方形に切った石をややカーブさせながら2列に配する。SD02から約8m西側であるが、地割を示す石組み溝の可能性もある。埋土中からは瓦や陶磁器類が出土した。

SX22 調査区中央付近で検出した土坑である。北側は攪乱により、南側はSE02により壊されている。深さ60cmで断面は掘り鉢状を呈する。ここからは瓜の種や籐木がまとまって出土したことから便所遺構であったと考えられる。おそらく土坑の上に木などを渡して使用したものであろう。便の集積層と考えられる層は3箇所に分かれ、この層には籐木を始め、木片、松葉などの植物遺体を多く含む。便の集積層の上部に部分的に緑灰色粘土層をはさんで貝殻や獣類の骨の堆積層がみられた。また、土坑の中位より上位ではおおむねどの層にも炭がみられた。土坑内からは瓦類、籐木に混じって木簡が1点出土した。

SX37 調査区東南隅で検出した土坑である。東側は調査区外へ延び、その他は後世の攪乱で破壊されている部分が多く、規模、形状は明らかでない。東西2m以上、南北2m以上、深さ50cm程度の規模を持つ。土坑内からは厚さ50cmにわたって陶磁器類、瓦とともに大量の木製品が出土した。その中には漆椀・蓋、下駄、人形の頭部、箸または籐木、曲物の蓋、木簡などの木製品が多量に含まれる。断面観察からこれらの木製品は一気に埋められたと考えられる。

SE01 調査区の西端付近で検出した石組みの井戸である。直径3.3m、深さ1.4mで遺構面から60cm程度掘り下げたところで石組みを2段検出した。埋土中からは陶磁器類がわずかに出土した。

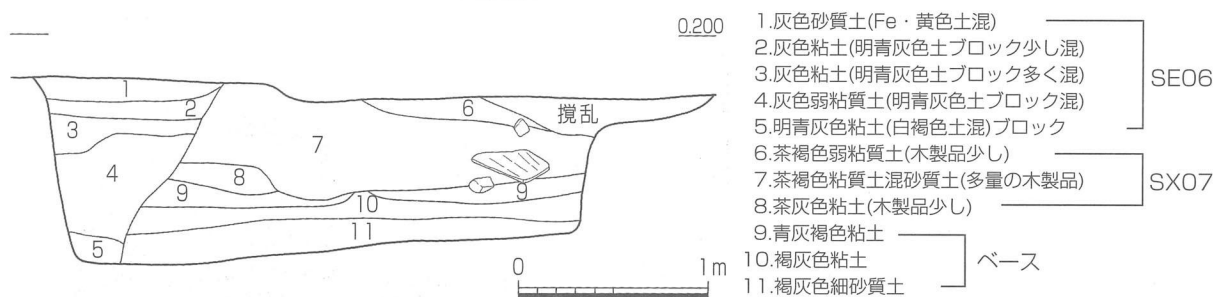


図8 SX37断面図(1/40)



写真4 SX37遺物出土状況(北から)

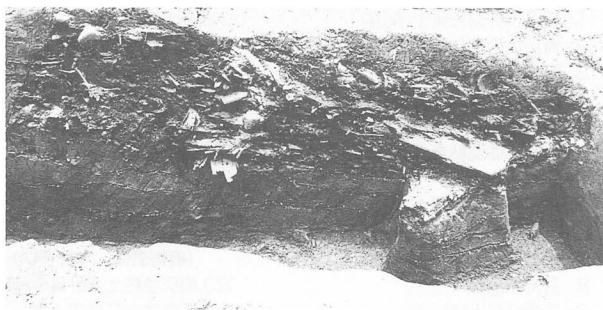


写真5 SX37断面(西から)



写真6~9 SX37出土遺物

SE02 SX22の一部を壊して掘られた井戸である。掘り方は直径3.5m、深さ1.8mの円形で、灰色砂礫層を掘り抜いている。井戸枠は桶が2段に重ねられていたと考えられるが、上段の井戸枠はタガしか残っておらず、桶枠は抜き取られたものであろう。桶の直径は60cm、長さ90cmである。最上面には30cm大の石が置かれていた。

SE03 SD04の埋没後に掘られた井戸である。直径1.2mの円形で深さ3.4mである。井戸枠は上段に直径75cm、高さ60cmの豊島石と呼ばれる円礫溶結凝灰岩を加工したもの、中段に残存長40cm、直径65cmの桶、下段に長さ1.4m、直径65cmの桶を設置している。井戸枠が3段重なっており、1~2度井戸枠を継ぎ足した可能性もある。井戸の内部からは、底部内面に梵字を、外面に『何処』と書いた土師質土器皿が出土した。

SE04 調査区中央付近で検出した井戸である。直径2.8m、深さ2mである。井戸枠は上段で素焼きの底を抜いた土師質土器、下段は桶であった。しかし上段の井戸枠が遺構面から90cm下で検出したこと、井戸の内側から多量の井戸枠と思われる土師質土器の破片が出土したことから当初は土師質土器の井戸枠は2段あったと考えられる。土師質土器甕の現存長は60cm、直径75cm、桶の現存長50cm、直径65cmである。最下段の井戸枠の桶は長さも短く傷みも激しく、特に桶の上端は腐朽が進んでいたため、土師質土器の井戸枠は後に補強したものとも考えられる。また、井戸の内部には井戸を破棄する際に空気抜きに使用したと考えられる竹が1本突き刺さっていた。井戸の中からは先端に耳搔きをつけた簪が出土した。

SE05 SE04の南西に接して検出した井戸である。直径3m、深さ2mの掘り方を持ち、砂礫層を掘り抜いている。井戸枠は桶を3段にしており、井戸枠の直径は55cm、一段の桶の長さは90cm程度である。SE04と同じく井戸を破棄するときに空気抜きに使用されたと考えられる竹が2本突き刺

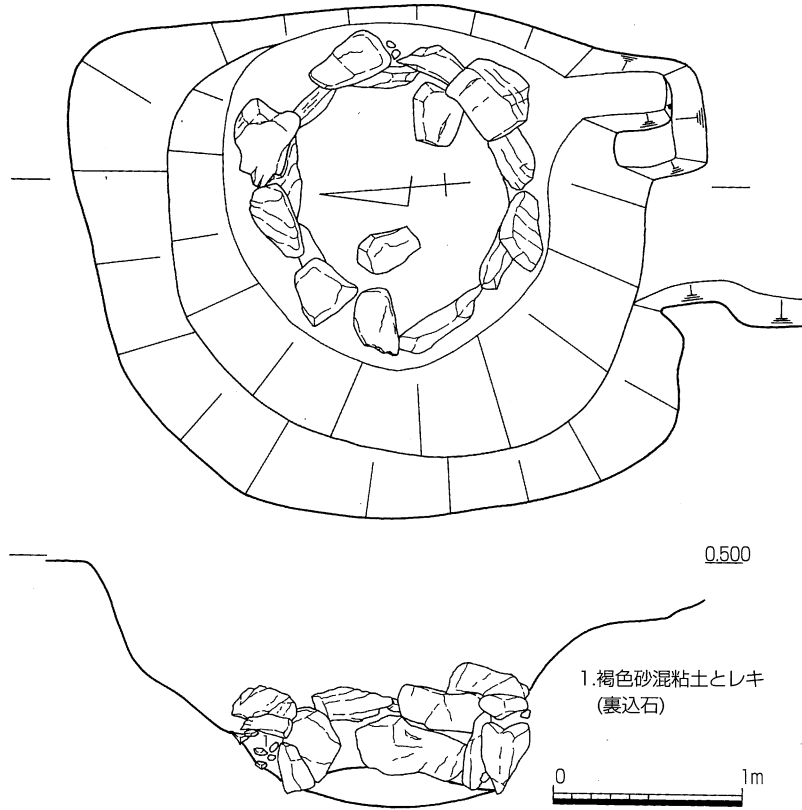


図9 SE01平・断面図(1/40)

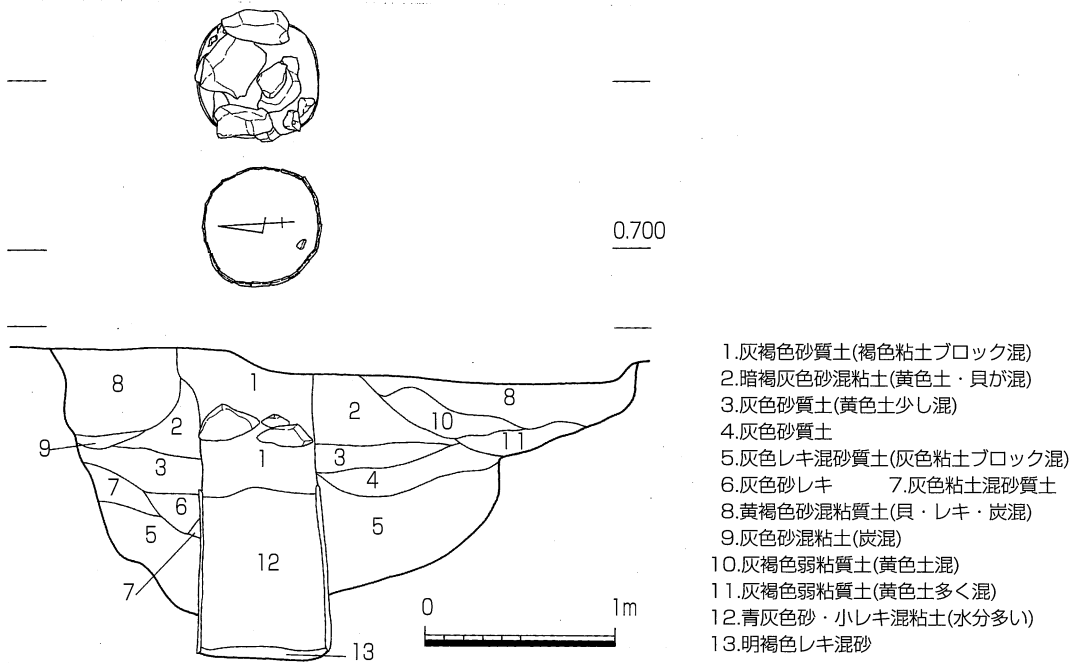


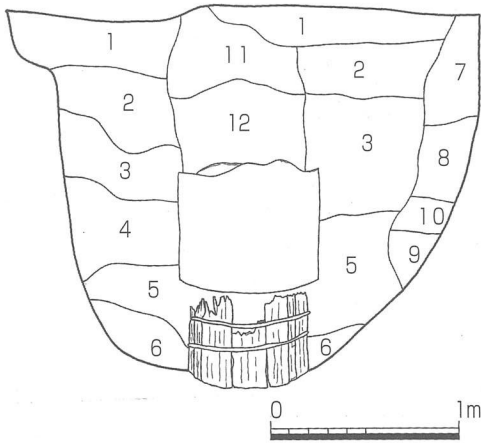
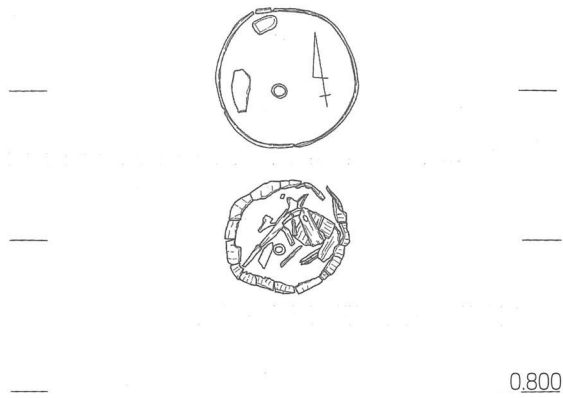
図10 SE02平・断面図(1/40)



写真10 SE03井戸枠検出状況(東から)



写真11 SE03(西から)



- 1. 黄褐色砂質土(黄色土混)
 - 2. 黄褐色砂質土(黄色土ブロック多)
 - 3. 灰色砂質土(黄色土ブロック混)
 - 4. 灰色砂混粘土
 - 5. 灰色細砂混粘土(緑灰色土ブロック混)
 - 6. 黄褐色砂レキ 7. 黄褐色シルト
 - 8. 褐色砂レキ 9. 灰色細砂質土
 - 10. 褐色細砂混粘質土
 - 11. 灰褐色粘質土(黄色土少し混)
 - 12. 灰色シルト
- } ベース

図11 SE04平・断面図(1/40)



写真12 SE04井戸枠・竹出土状況(南から)

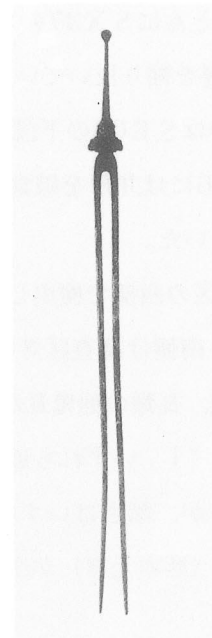
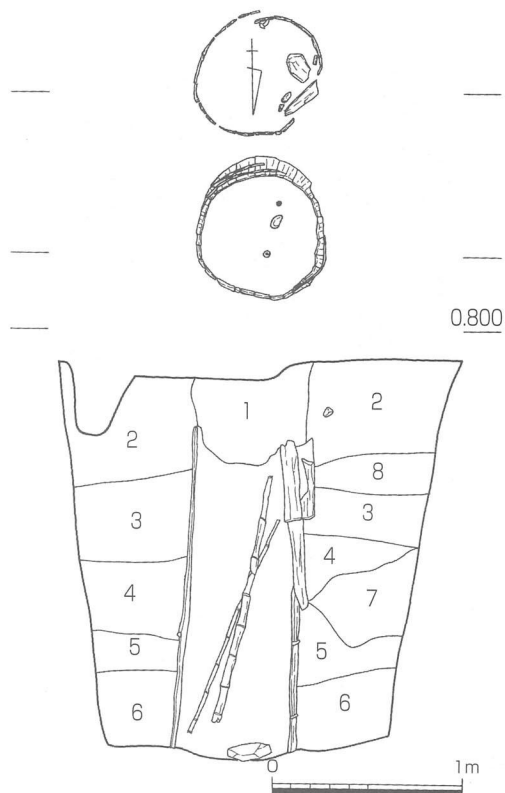


写真13 SE04出土遺物



1. 明褐色砂質土
2. 明灰褐色砂質土で白褐色砂質土ブロック混
3. 明灰色砂質土で明青黄灰色土ブロック混
4. 明灰色砂混粘質土で明青黄灰色土が少し混
5. 明灰色砂混粘土で明青灰色土が入り混る
6. 灰褐色砂レキ(ベース)
7. 明灰色砂混粘質土で青黄灰色土が斑状に入る
8. 明灰色砂質土で黄色土ブロック混

図12 SE05平・断面図(1/40)

さっていた。

SE06・07 とともにSX37の北側で検出した井戸である。掘り方の直径1.8m、深さ1.6m、桶枠の直径70cmで砂礫層を掘り抜いている。SE06はSX37の一部を破壊している。掘り方はともに攪乱により不明、井戸枠はSE03の下段と同じく長さ1.4m、幅15cmの板を立てて円形にし、途中3箇所にてガガを巻く。SE06には井戸を破棄する際に井戸の内部全体に多量の瓦類を、SE07にも下部1/3程度に瓦類を投棄していた。

SX10 調査区の西部で検出した遺構である。上面は建物の基礎により壊されていた。おおむね長方形で東西8m、南側は調査区外へ延びるため、南北方向の規模は不明、深さは25cmである。遺構の中からは陶磁器類、瓦類の他鬼瓦が出土した。

SX08・09・11 いずれも道路状遺構の上面から掘り込まれたと考えられる土坑である。平面形はそれぞれ異なるが、深さはいずれも30cm程度で、土坑内からは多量の瓦や陶磁器類が出土した。SX11からは北宋銭（熙寧元寶）が出土した。



写真14 SE07(北から)



写真15 SX10鬼瓦出土状況(西から)

3. まとめ

今回の調査は第3遺構面の調査で、それも攪乱でかなりの範囲が破壊された状態であったが、その中でもいくつかの成果をあげることができた。まず、平成8年度調査の延長部と考えられる道路状遺構を検出できた。溝からの出土遺物はほとんどなく、時期の特定は難しいが、これにより絵図・屏風などの絵画資料との対比をある程度行うことができる。今回明らかな掘立柱建物を検出することはできなかったが、西南隅で柱穴が並ぶものもあり、掘立柱建物を構成する可能性がある。また、SD04、SD05など道路状遺構と同一または直角方向の溝もあり、何らかの区画溝である可能性は高いだろう。ただ、SD02が出土遺物が皆無であったのに比して、SD04からは多量の瓦類が出土しており、同時期のものではない可能性が高い。SX01についても、北側が後世の攪乱で壊されているが、溝になる可能性も高く、区画割りとしての機能を果たしていたことも考えられる。今後さらに出土遺物等の検討を加える必要がある。

SX37からは多量の木製品が出土した。この中には家紋や文様を配した漆椀、人形の頭部、下駄など様々な生活用品に混じって20点余りの木簡が出土した。まだほとんどが未解読であるが、解読されたものは簡単な住所と名と月日のみを記した付札のようで、時期の特定や、この地に居住している人物名の特定にはつながらなかったが、今後これらの内容が明らかにされれば、大きな成果を得ることができよう。

SX22からは排便に含まれていたと思われる種子類、その上面では廃棄されたと思われる貝類、獣骨、魚骨類などが出土し、当時の食生活を知る手がかりが得られよう。

7基検出した井戸については、細かい時期決定は遺物を細かく検討していく必要があるだろうが、大きくは石組み井戸、桶を重ねた井戸、長い板を桶状に丸くしたものの3種類に分けられる。このうち石組みの井戸からはほとんど遺物は出土せず、他の井戸から陶磁器類や多量の瓦類が出土したこととは対照的である。土師質土器と桶を重ねたものは、形態は平成8年度の調査の第1遺構面の近世後半の井戸と、長い板を桶状に丸くした枠を持つ井戸は第1整地面の井戸と類似しており、時期的にも同じものである可能性があるだろう。

今回の調査で検出した遺構は生駒藩時代のものに限らずそれより新しいものもかなり含んでいると考えられる。それらを分けていくには今後さらに出土遺物を検討していく必要があるが、出土遺物の大半を占めているのは瓦類である。瓦類は陶磁器類に比べて時間による変化が乏しく、時期決定が難しい。今後出土した陶磁器類と瓦類を検討しながら瓦類の時間的な変遷をつかみ、今回検出した遺構の時期的な錯分けをすることが今後の課題である。



写真16 調査区全景(西から)



写真17 調査区から本丸を望む(西から)

報告書抄録

ふりがな	たかまつぎたけいさつしよけんせつにともなうまいぞうぶんかざいちようさがいほう たかまつじょうあと							
書名	高松北警察署建設に伴う埋蔵文化財調査概報 高松城跡							
副書名								
巻次	平成10年度							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	山元素子・岡本利							
編集機関	財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒762-0024 香川県坂出市府中町南谷5001-4 TEL 0877-48-2191							
発行機関名	香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター							
発行年月日	平成11年3月31日							
総頁数	目次等	本文	観察表	図版	写真枚数	挿図枚数	付図枚数	
16頁	4頁	12頁	0頁	0頁	17枚	12枚	0枚	
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町	遺跡					
たかまつじょうあと 高松城跡	かがわけん たかまつしにしうちょう 香川県高松市西内町2-30	37201		34° 20' 47"	134° 2' 56"	19980401 ～ 19980630	900㎡	高松北警察署建設工事に伴う
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
高松城跡	屋敷地	江戸時代	溝・井戸・土坑	瓦・陶磁器 銭貨・木簡 下駄・漆器				

高松北警察署建設に伴う埋蔵文化財調査発掘調査概報

平成10年度

高 松 城 跡

1999年3月

編集 〒762-0024 香川県坂出市府中町南谷5001-4
財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター

発行 香 川 県 教 育 委 員 会
財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター

印刷 富士印刷株式会社